

権八の罪

野村胡堂

—

「八、居るか」

向柳原の叔母さんの二階に、独り者の気楽な朝寝をしている八五郎は、往来から声を掛けられて、ガバと飛起きました。

障子しょうじを細目に開けて見ると、江戸中の桜の蕾つぼみが一夜の中に膨ふくらんで、蕘いらかの波の上に黄金色の陽炎かげろうが立ち舞うような美しい朝でした。

「あ、親分。お早う」

声を掛けたのは、まさに親分の銭形平次、寝乱ねみだれた八五郎の姿を見上げて、面白そうに、ニヤリニヤリと笑っております。

「お早うじゃないぜ、八。もう、何刻だなんどきと思う」

「そのせりふは叔母さんから聞き馴れていますよ。——何んか御用で？ 親分」

八五郎はあわてて平常着ふだんぎを引掛けるながら、それでも減へらず口を叩いているのでした。

「大変だぜ、八五郎親分。こいつは出来合いの大変と大変が違ちがうよ。溝板どぶいたをハネ返して、野良犬を蹴飛ばして、格子を二枚モロに外すほどの大変さ」

平次はそういいながらも、一向大変らしい様子もなく、店先へ顔を出した八五郎の叔母と、長閑のどかなあいさつを交しているのです。

「あつしのお株を取っちゃいけません。——どうしたんです、親分」

八五郎は帯を結びながら、お勝手へ飛んで行って、チヨイチヨイと顔を濡らすと、もう店先へまぶし相そうな顔を出しました。

「観音様へ朝詣りをするつもりで、フラリと出掛けると、途中で大変なことを

聴き込んだのさ。お前に飛込まれるばかりが能^{のう}じやあるまいと思つたから、今日は俺の方から、『大変』をけしかけに来たんだ。驚いたか、八」

「驚きやしませんよ。まだ、親分は何んにもいってないじやありませんか」

「成程、まだいわなかつたのか。——外^{ぐわい}じやない。広徳^{こうとく}寺前の米屋、相模^{さがみ}屋総兵衛^{べい}が、昨夜^{ゆうべ}人に殺されたんだとさ」

「へエ——。あの評判の良い親爺が？」

「どうだ、一緒に行つて見ないか」

「行きますよ。ちよいと待つて下さい親分」

「これから飯を食うのか」

「腹^へが減^へつちや戦が出来ない」

「待つてやるから、釜^{かま}ごと嘯^{なげ}らないようにしてくれ。あ、自棄^{やけ}な食いようだな。

叔母さんが心配しているぜ。早飯早何んとかは芸当のうちに入らない」

「黙っていて下さいよ、親分。小言をいわれながら食ったんじゃ身にならねえ」
「六杯と重ねてもか」

そんな事を言いながらも、八五郎は飯を済ませて、身仕度もそこそこに飛出しました。

広徳寺前までは一と走り、相模屋の前は、町内の弥次馬で一パイです。

「えッ、退かないか。その辺に立っている奴は皆んな掛り合いだぞ」

三輪の万七の子分、お神楽かぐらの清吉が、そんな事を言いながら、人を散らしております。

「どうした、お神楽の。下手人ほしは拳こぶしがったか」

平次は穏かに訊きました。

「拳こぶしったようなものですよ。帳場の金が百両無くなつて、下男ごんぼちの権八ごんぱちというのが逃げたんだから」

「逃げた先の見当は付いたかい」

余計なことを、ガラツ八は口を挟はさみました。

「解とけているじゃないか。吉原の小紫こむらさきのところよ。——野郎の名前は権八だ」

「へッ」

八五郎は唾つばを吐きました。まさに一言もない姿です。平次はそんな事に構わず、相模屋の中に入って、いきなり事件の核心かくしんに触れて行きます。

殺された相模屋総兵衛は、その時もう六十歳。早く女房に死に別れて、跡を継つぐべき子供も無かったので、二人の姪めい——お道、お杉——を養って淋しいが、しかし満ち足りた暮しをしている、有徳の米屋でした。

口やかましくて、手堅い性分で、なまけ者や誤魔化ごまかしを見ていることの出来なかつた総兵衛でしたが、その一面には慈悲の心にも富み、信心も篤あつく、まず町人としては申分のない人柄で、人に殺される筈もないようですが、物事に容よう

赦しやのない性格が、飛んだ怨うらみを買ったのかもわかりません。

平次はともかく、番頭の市五郎に逢って、いろいろのことを訊きました。市五郎は四十五六の一癖あり気な男ですが、日頃主人の総兵衛は何も彼かも自分の胸一つに決め、大事小事ことごとくその差金さしがねでやっていたので、番頭といつても、あまり身上に立ち入ったことは知らず、米の粉に塗まみれて、ただもう他の奉公人たちと一緒に働いているといった様子でした。

主人総兵衛の死骸は、今朝あす姪めいのお杉——下女同様に働いている二十五の大年増が、雨戸が一枚開いているのに驚いて、その寝間を覗のぞいて発見しました。お杉の声に集まった人たちは、床から少しのり出して、紅あけに染んでこと切れている主人の凄じい姿に胆きまを潰つぶし、たちまち煮えくり返るような騒ぎが始まったのです。

傷のどは喉へ一箇所、馬乗になつて突いたものでしょうが、余ッほど落着いた手

際で総兵衛は多分声も立てずに死んだことでしょう。兇器は総兵衛自身が寢室の床の間においた用心の脇差で、それは曲者が逃げる時、面喰めんくらって持出したものか、裏口の外、溝の中に抛ほうり込んでありました。

無くなったものは、現金で百両、それは番頭の市五郎もよく知っております。昨夜帳尻ちやうじりをしめて現金百十二両主人に渡し、主人はそれを空財布からさいふに入れてふところに入れたのを見ていたのですが、死骸の側にほうり出した財布には、小粒で十二両残っているだけ、小判で百両の金は、どこにも見当らなかつたのです。

「主人を怨む者はなかつたのか」

平次は、こんな平凡へいほんなことを訊ねました。

「慈悲深い、よく出来た御主人でございました。怨む者がある筈もございませ
ん」

「昨夜から見えないという下男は？」

「権八と言つて、二十九になる男でございます。下総しもとうさの古河の者で、十年前から奉公し、まことに実直に勤めておりました。主人を害めるあやような、そんな男ではございません」

「その権八の荷物はどうした」

「それも三輪の親分さんがお調べになりましたが、——着換一枚だけ持ち出したように」

そういわれると、この下手人げしゅにんは、権八に間違いはないようです。

「権八の在所へは？」

「三輪の親分さんが追手おってを出しました」

それではもう、平次にしなければならぬ仕事は一つもありません。

念のため、二人の姪めいに会って見ました。一人はお杉と言って二十五、これは総兵衛の妹の娘で、容貌ようぼうも十人並、少し三白眼で、身体は頑丈ですが、何んのも特色もない女、下女同様にこき使われて自分もそれに満足し切っている様子です。

「縁側の雨戸が一枚開いているんでびっくりしましたよ。若もしやと思って覗いて見ると伯父さんが——」

お杉はゴクリと固唾かたずを呑んで、三白眼を大きく見開きます。肩に肉の付いた、手は凍傷とうしょうの痕あとのある、なりふり構わぬ姿です。

平次は総兵衛の死骸を一応見せて貰い、わけでも、傷口をよく調べた上、雨戸のあけてあったという辺の敷居を念入りに見たり、戸締りの工合を見たり、

「戸締りは誰がするんだ」

「私がしますよ。昨夜も酉刻半（七時）前によく締めた筈です——え、上下の
棧さんと心張で」

「その心張はどうなっていた」

「縁側に落ちて居ましたよ。戸は一枚開けっ放したままで」

「主人は眼ざとい方か」

「それはもう、お年ですから、少しの音でも眼を覚しました」

「尤もつとも、ここで少しくらい音を立てても、皆んなの休む方へは聴えないな」

「ずいぶん離れていますから」

お杉は顔にも、様子にも似ず、よく気の廻る女でした。こう話していると、
次第にこの女のよさや賢さが解ってくる様な気がします。

平次は狭せまい庭へ降りて見ました。そこから裏口まではほんの二間ばかり、滅
多に陽の当たらない土の上には、少しばかり庭下駄あとの跡しるが印しるされてありますが、

それが何んの意味があるのか、ガラッ八には解りません。

もう一人の姪のお道というのは、総兵衛の弟の娘で十九、これは美しくもあり、若くもあり、その上身装みなりなども、相模屋のお嬢さんらしい贅沢なものでした。後で店の者や近所の人の噂を集めると、総兵衛はこの美しいお道の方を溺愛あいして、同じような関係の姪めいでありながら、これに聳を取って、相模屋の跡取にするつもりであったようです。

「私は何んにも知りません。———どうしたら宜いでしよう」

何にか訊きかれれば、そういつておろおろするお道———その直すぐでも泣き出しそうな美しい顔を見ていると、平次も手の下しようがありません。ただ、伯父の世話は一切お杉が引受けてするので、自分は何んにも知らなかつたということ。夜はお杉と同じ部屋に寝るが、二人ともよく眠るので、地震や近所の火事さえ知らずにいて、翌る朝、よく店の者に笑われる話など、まことに他愛たわいも無

い口振りです。

「逃げた権八はどうだ」

平次は問いを転じました。

「正直者で、よく働きました。でも、本当の田舎者で——」

お道の頬は少し綻ほころびます。

手代の徳松というのは二十五六、これは店中で一俵の米を扱あつかい切れないただ一人の弱い男で、色の白い背の高い美男でした。

「主人は商売柄六十を越しても、一俵の米が軽いという人でしたが、私は御覽の通りの病身で、帳面の方ばかりやっております」

そういつて淋しく笑うと、女のような表情になるのを、徳松は、自分でもひどく恥はじ入いっている様子です。

「ゆうべ何んか変わったことが無かったのか」

「表二階へ小僧の庄吉といっしよに早寝をしてしまいました。何んにも存じません」

「下男の権八はどんな男だ。知ってるだけのことを訊きたいが——」

「正直一途ずの男でございます。自分が曲まったことをしない代り、人の曲まったことも容赦ようしやしないと云った」

「フーム、主人とよく氣風が似ているんだな」

「へエ、時々それで変なことがございました。これはまア、申上げない方が宜いでしょうが」

徳松は自分のいい過ぎに氣が附いたらしく、あわてて口を緘つぐみました。

「変な事？ それを聴かしてくれ」

「へエー」

「隠しちゃいけない。いずれは知れることだ。主人と権八の間に何があったん

だ」

「では申し上げます。——私はただ小耳に挟んだだけで、詳しいことは、番頭さんがよく知っておりますが」

「番頭さんからは後で訊くよ」

「——斯うでございます。権八がここへ奉公してから十年になるんだ相で、その間に稼ぎ溜めた給金——年に四両の決めと、いろいろの貰いや何んかを、手も附けずに主人に預けたのが、五十両とかになった相で——」

「フムフム」

「在所へ帰って質に入れた田地を請出し、年を老った母にも安心させたいから、それを返して下さいと、一年も前から二三度主人にかけ合いましたが、主人はどうしたとか返してくれません」

「フーム」

「今年も出代りの三月三日が過ぎたが、暇ひまもくれそうもないといつて、権八は昨日も愚痴ぐちをいっていました。仏相模屋総兵衛といわれた御主人が僅か五十両ばかりの奉公人の金を、どうしようというつもりはないに決っておりますが、権八は国にいる頃——まだ前髪も取れない中から勝負事に凝こり、それで祖先伝来の土地まで質に入れ、年取った母一人を留守に、自分は江戸の知辺しるべを頼って奉公に出た相ですから、それを知っている主人は容易に金を渡さなかつたのも無理はありません」

徳松の話は思わぬ方まで発展して、下男権八の動機を説明してくれます。つづいて平次は小僧の庄吉に会いましたが、これは十四五の白くも頭で、脅おびえ切つて何を聴いても解りません。ただ、表二階に徳松と同じ部屋に寝ているが、ぐっすり寝込んで何にも知らなかつたというだけの事です。

昼過ぎまで、何んの発展もありません。下総しもうさの古河こがへ下男しもやの権八を追わせたのは、三輪の万七の指図ですが、本当に主人を殺して金を取ったのなら、自分の故郷へノメノメ帰るかどうか、それも怪あやしいものです。

平次はともかく家中の者の持物を調べる事にしました。まず番頭の市五郎から始めて、徳松、庄吉と調べて行くと、

「親分——こんなものがありましたぜ」

ガラッ八の八五郎は紙包を持って来ました。

「何んだいそれは？」

「小判ですよ、親分。小判で五十両」

「何？」

受取つて見ると、まさに小判で五十両、紙包は少し破れましたが、燦さんとして山吹色に輝きます。

「こいつが仏様の前にありましたよ」

「仏様の前？」

「線香の側、——香こう奠でんじゃありませんよ」

「荷物の調べが始まるんで、あわてて仏様の前へ持って行つたんだらう。誰があの部屋へ入つたか訊いてくれ。荷物の調べが始まつてからちよつとの間だ」

「へエ——」

ガラツ八は飛んで行きましたが、これは縮しく尻じりりました。あんまり多勢入つたので、誰がそんな事をしたかわからなかつたのです。

荷物の調べはつづけられました。お杉の荷物——行李こうりが一つと、一抱えの着物の中から、ひどく血に汚れたあわせ袷あわせが一枚出た時は、見ている限りの者は色を失

いました。わけても当のお杉の狼狽振りは目もあてられません。

「あ、それは、それは」

三白眼が無気味に見開いて、口はただパクパクと動くだけ。

「え、女、神妙にせい」

どこから飛出したか、お神楽かぐらの清吉、お杉の後に廻って、その背を十手でピ

シリと叩きます。

「お神楽の兄哥、そいつはまだ早い」

平次はそれを押止めました。

「えッ、何が早いんだ。銭形の親分」

「血は皆んな袷うしろの背後に附いているぜ。後ろ向になって人を突き殺す奴はない

よ。それに、お杉は自分の着物に血の附いてることも知らずにいた様子だ。――

――この着物はどこに置いてあったんだ」

平次はお杉に訊きました。

「洗濯物せんたくものといっしょに、梯子段の下に突っ込んで置きました」

お杉は平次の助け船に、ようやく平静を取戻しました。

「だがネ、銭形の親分。この女は伯父を怨うらんでいたぜ。——伯父の総兵衛は、自分より年の若いお道を可愛がって、跡取あととりにしそうだったんだ。いま殺さなきゃ

——

「そんな、親分。私はそんな事を考えたこともありませんよ」

お杉はあわてて清吉を遮さえぎりましたが、自分の身にふりかかる恐ろしい疑いに圧倒されて、ろくに口もきけない様子です。

「それより面白いことがあるんだ、八。荷物の調べが一通り済んだら、その小僧に訊いてくれ。五十両という大金をどこから出した——と」

「え、五十両を仏様の前においたのは、この小僧ですか」

八五郎はえんびを伸ばして、逃げ腰の庄吉を押えました。

「小判の包紙に、まめね豆捻じの粉が附いているんだ。小判と駄菓子といっしょに懐ろへねじ込むのは、店中にその小僧の外にはあるまい」

「この野郎、——どこから、誰に頼まれて持って来た。言わなきやお前が下手人だぞ、主殺しははりつけ磔刑だ。来るか」

八五郎の脅しはおど利き過ぎるほど利きました。

「ワーツ、勘忍しておくれよ。おいらじゃない。おいらは何んにも知らないんだ」

「じゃ、誰に頼まれた」

「権八だよ」

「何？」

「権八がゆうべ遅くおそ帰ってきて、店の臆病窓を締めようとしたおいらに、この

金包を渡したんだ」

と庄吉は泣きながら、思いも寄らぬことを言い出すのでした。

「それから何うした」

と平次。

「これは旦那に返してくれ、百両持って行っちゃ済まないから、わざわざ千住から引返して来ました——というんです」

「なぜ昨夜のうちに返さなかった」

「旦那はもうお休みだったもの、返せやしないや。仕方がないから一と晩待っている、今朝はあの騒ぎだ」

「なぜ直ぐ出さなかった」

「怖こわかったんだもの、うっかり金なんか出せはしないや」

庄吉は脅おびえ切っておりませんが、それでも何どうやらこうやら、これだけの事は

説明しました。

四

この上は追っ手が古河から、権八をつれて来るのを待つほかはありません。

相模屋の店中も、ようやく平静を取戻して、型通りの検屍を済ませた上、親類や近所の衆が集まって、葬とむらいの仕度に、しばらくは取紛とりまぎれております。

しかし平次は、その間も黙って見ていたわけではありません。下男の権八が下手人にしても、千住から引返して、盗んだ百両の半分を返して行くというのは、何んとしても説明のしようのない態度です。事件は外面に表れた形相より、もつともつと深いものかも知れず、どうかしたら、権八は下手人でないかも知れないのです。

八五郎と力を協あわせて、その日一日、平次の手に纏まとめた材料というのは、総兵衛は慈悲心に富んだ人間ではあったが、少し頑固がんこで曲まった事や正しくない者には恐ろしく冷酷であったこと、お道とお杉の二人の姪めいのうち、自分に親しかつた弟の娘で、美しくて女ひと通りの諸芸にも疎うとくないお道を偏愛へんあいし、それと手代の徳松を嫁合めあわせて、相模屋の身上を譲るつもりであったこと、お杉は正直で働き者だが、世辞あいぎょうも愛嬌あいぎょうもないために、伯父の総兵衛にもあまり可愛がられず、お道の父の姉の子でありながら、下女同様に追い使われていたことなど、——次第に、この家の空気や人の関係が明らかになつて来ました。

その日はともかく引揚げた平次は、八五郎と下つ引を二三人動員して、なお念のために、相模屋の家族と奉公人の身持を洗わせることにしました。

「番頭の市五郎は喰えない男らしい。通いだというから、暮し向をよく調べてくれ。手代の徳松は男が良くて人付きが宜いから、少しは遊ぶだろう。それも

念入りに、金の費い振りや、悪い癖くせがないか、よく訊き出すんだ」

「へエ、そんな事ならわけはありませんよ」

ガラツ八は、気軽に飛んで行きました。

それから、まる一日。

「親分、——お助け——」

いきなり平次の家へ飛込んだ者があります。薄暗くなりかけた格子の中、柄がらの大きい男は、上がり框がまちに縋すがりついて、追われた猛獣のような目で平次を見上げました。

「お前は？」

晩飯までの待遠しき、長閑のどかな春の夕暮を煙草にしていた平次は、何んか期待していた者が飛込んだような心持で、その男を眺めました。

せいぜい二十八九、まだ若くて眼鼻立も立派な男ですが、恐ろしく陽に焦やけ

て、手足も節くれ立ち、着ているものも、木綿布子の至つて粗末なものです。

「権八です。——相模屋の権八ですが、私は縛られるかも知れません」

「——」

「私が主殺しをするかしないか、銭形の親分さんなら、よく解つて下さるでしょう」

「まア、話を聴こう、入れ」

「へエ——」

平次の表情はまだほぐれませんが、調子がいくらか柔かになると、権八は安心した様子で、そそくさと草鞋わらじを脱ぬぎます。

「所ところで、お前はどうしてもして古河から帰つたんだ」

座が定まると、平次は静かに問いました。

「私は大変な間違いをしました、親分」

「間違いい？」

「相模屋へ奉公してから十年、若い時フトした間違いで質しちに取られた田地を受け戻そうと、私は必死に働きました。旦那の総兵衛様は、私に取っては二代の主人でございます。と申すのは、亡くなった私の父親も、昔は相模屋に奉公しておりました。本当に良い方で」

「――」

権八がホロリとするのを、平次は黙って先を促うながしました。

「ところが、十年の約束の年限ねんげんが過ぎ、金も五十両と溜たまりましたが、主人はどうしても私にお暇を下さらず、預けておいた金も下さいません。あとで考えると、昔が昔ですから、金の顔を見ると、また私の道楽が始まりはしないかと、それを心配して下すったのでしよう。でもそのとき私は、そんな事とは気が付きません。約束の年季を一年も過ぎ、古河の母からは矢やの催促さいそくで、近ごろ年を

取つて、めつきり弱つたから、早く帰つて顔を見せてくれと言われる度たびに、私は暇も金も下さらない主人を怨うらみました。とうとう我慢が出来なくなつたのは、この出代り時の三月三日でございました」

「主人はあの晩私を呼んで、お蔵前へ届ける百両の金を預け、明日夜が明けたらすぐ持つて行つてくれ、私は遅いかも知れないから、今からやつて置くと仰しやるのです。私は承知をしてその百両の金を受取りましたが、それを見ていたのは姪御めいごのお道さんだけ——」

「私はフト、気が変わりました。どうせ暇ひまも金も下さらないのなら、この金を持つて故郷の古河へ帰り、十年振りで母の顔も見、質に入れた田地うけもども請戻うけもどそうとそのまま飛出してしまいました。が、千住の大橋へ行つて気が附いたのです、腹

立ち紛まぎれに飛出したものの、私が主人に預けてある金は五十両、ここで百両の金を持逃げしては、私は、泥棒になります。そう思うと矢も楯たてもたまらず、引返して店の臆病窓おくびょうまどから小僧の庄吉どんに半金の五十両を渡して、御主人に返すように頼み、それから夜通し歩いて下総の古河へ、翌日の夕方着きました——ところが驚いたことに——」

権八はたくましい拳骨げんこつで、涙を押し拭いながらつづけました。

「——驚いたことに、それより三日前、江戸の相模屋の使の者が、五十両の金を持って来て、私が昔質に置いた田地を、皆んな請戻うけもとして帰ったと言うじゃありませんか。私が並べた五十両の小判を見て、母も驚きましたが、それより、母の話聞いた私の驚きは——」

「皆んな御主人の有難い思いやりでした。私に金を持たせると、録ろくな事はある

まいと、わざわざ金を持たしてやって、質に入っている田地を受けて下すつたのです。——私は大地をこの額で叩いて、江戸の御主人にお詫わびをしました。

母も思いのほか達者で、まだしばらくは私の帰りを待ってくれるといいますが、その晩のうちに古河を立ち、一刻も早く主人に会ってお詫わびをしたい心持一パイで江戸へ帰ると、——あの騒ぎです」

「途中で追っ手に逢わなかったのか」

「私は近道を拾って来ました。——こうとくじ広徳寺前まで来ると、店に入る前に、運よ

くお杉さんに逢つたのです。——私はお杉さんから皆んな聴きました。旦那は

本当にお気の毒で、あんなに良い方を殺すなんて、罰ばちの当つた野郎があつたも

ので——私じゃありません。が私が下手人と思ひ込まれている相そうですから——

うっかり顔を出すと、どんな事になるかも知れない。こいつは銭形の親分さんに相談してみるが宜い。現に血の附いた袷あじで、私も疑われたが、後ろ向きになつ

て人を刺す者はないと言つて、たった一言で疑いを解いて下さった錢形の親分さんだから、お前さんの潔白けっぱくもよくわかるだろうと——お杉さんが教えてくれました。親分さん、お願いでございます。私を助けて、主人の敵を討つて下さい」

若くて生一本な権八は、平次の前に手を合せて、恥も外聞もなく泣くのです。

「拝むのは止してくれ。——話を聴くと、なるほどお前のいうのは本当だろう。

あの晩五十両の金を持って、千住の大橋から帰つたと聴かなきゃ、俺だつてお前を下手人にするよ。ところで、その晩主人から金を受取るのを、お道が見ていたと言つたな」

「いえ、それは」

「言訳しなくても宜い。お前は先刻さつきそう言つた筈だ。——金を持って故郷へ帰る気になつたのは」

「へエ——」

「お前の智恵じゃあるまい、誰に教わった」

「そればかりは親分さん」

権八は尻ごみするのです。

「馬鹿ッ」

「へエ——」

平次がいきなりたいかつ大喝すると、権八は雷鳴かみなりに打たれたように、がばと身を起して居ずまいを直しました。

「主人が殺されたんだぜ、おい。お前が泣いて有難がる御主人の総兵衛は、お前の不心得が切っかけになって人手に掛ったとしたら、お前にも主殺しの罪はないとはいえない」

「親分さん」

「さア言え、お前に金を持逃げする智恵をつけたのは誰だ。その人間が下手人だとはいわないが、それからたぐれば、下手人が知れるんだ。お主の敵を討つ気があるならいえッ」

「私は約束しました。——こればかりはいわないと」

「馬鹿ッ、お前がいわなきや、俺が言ってやろう。その智恵をつけたのはお道だろウ」

平次の言葉は苛辣しんらつで、嚴重で、何んの仮借かしゃくもありません。



©2017 萩 袖月

「そうまで御存じなら申して宜いでしようか、親分さん——実はお道さんが、何時までそうして奉公していても、伯父さんは吝けちだから、五十両と纏まとまった給料は払わないだろう。お前は金で釣られて無駄奉公しているのに気が附かないか。幸い金が入ったんだから、それを自分のものだと思って国へお帰り、あとは私がうまくいっておくから——と」

「よしよし、大方そんな事だろうと思ったよ。八、聴いたか」

「へエ——」

「市五郎は人相は悪いが手堅てがたい男だ。徳松はなかなかの道楽者だと言ったな」

「その上、町人のくせに勝負事にも手を出して、主人にひどく叱られた相ですよ」

「それで解った。下手人は家の中の者、権八の家出を知ってやった仕事だ。お道は女だからまさかあんな手荒な事はできまい。——お杉あわせの袷あわせを胸へ当てて、

返り血を除けながら主人を刺すような太い奴は誰だ。解るか、八」

「親分、行きましよう」

平次と八五郎は広徳寺前へ飛びました。

手代徳松が、主人の柩ひつぎを送り出して、澄して帳場にいる所を苦もなく縛り上げられた事は言うまでもありません。それを慕したう姪のお道も、泣き叫びながら、ガラッ八の手に引立てられます。

×

×

「相模屋の一件は片附いたが、あつしにはまだ解らない事がありますよ」

一と月も経たつてから、ガラッ八は、また平次に絵解きをせがむのです。

「底も蓋ふたもないよ。徳松の不始末が知れた上、主人の総兵衛は、お道のおしゃれで薄っぺらなのがだんだん嫌になったのさ。それに比くらべると、お杉は不縹きりよう織だが良い女だ。——跡取がお杉になり相なので、徳松はお道をそそのかして、

権八に金を持逃げさせ、その晩庄吉の寢息を窺^{うかが}つてあんな事をしたのさ。梯子段の下でお杉の袷を見附け、逆^{さか}に手を通して、胸へ飛沫^{しぶ}く血を除^よけたのは憎いじゃないか」

「なるほど」

「いづれ相模屋の後はお杉が継^つぐだろうよ。聾^{むこ}は権八さ。あれは考えは足りないが良い男だ。千住の大橋から引返して五十両を小僧に渡した心掛が気に入ったよ。——尤^もも最初から逃^もげ出さなきや猶^な良^おいが、そこが凡^{ほん}夫^ぶの悲しさだ」

「お道は？」

「可哀想だが心掛が悪い。追放^{ついほう}かな、島へやるほどの罪かも知れないよ。尤^もも徳松が伯父を殺す気があるとは知らなかったらしい」

平次はまた平静な生活に浸^{ひた}って、静かに次の事件を待つのでした。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十八年三月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第七卷 河出書房 昭和三十一年八月五日初版

編集・発行 銭形倶楽部

罪の八の権



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>